



日本植物病理学会ニュース 第38号

(2007年5月)

【本学会活動状況】

1. 大会開催報告

平成19年度日本植物病理学会大会は3月28日から30日にかけて、宇都宮大学峰キャンパス（宇都宮市）において開催されました。折りしも平年より6日も早く桜が開花し、会期を通して天候にも恵まれて幸いでした。今年度は北関東地区の担当で、地区各機関に運営委員をお願いしたほか、「静岡方式」に倣って、プログラム編成を分業化し、つくば地区の精鋭に担当していただいたため、大会本部の負担も軽減し、その分、会場設営、運営に専念することができました。高橋賢司プログラム委員長はじめご尽力いただきました委員の皆様にご心から感謝申し上げます。講演申し込みは例年よりやや少なめの398題でありましたが、一方で、大会参加者は、20名を超える名誉会員及び永年会員を含めて、1000名の大台を超え、関係者一同感激しております。しかし、このため講演要旨集が不足してしまい申し訳なく存じております。本大会では、講演発表をパワーポイント方式に統一しました。大きなトラブルもなくスムーズに進行できましたのも講演者のご協力の賜物と感謝しております。

懇親会は28日夕刻、市内のホテルで開催され、約450名が参加されました。来賓の宇都宮大学菅野長右エ門学長から歓迎と病理学会の90年に及ぶ歴史に触れたお言葉をいただき、次いで宇都宮市内の酒蔵が鬼怒川の伏流水で醸した「四季桜」による鏡割りの後、参加名誉会員中最長老の山中達先生から現在の植物病理学会に対する檄をいただき、続いての力強い乾杯の音頭で開宴しました。宇都宮市は「ジャズ・カクテル・餃子」の街を謳っておりますので、懇親会ではその三点セットを全て揃えました。栃木県農業試験場の一員を含むジャズカルテットの演奏には露無慎二副会長が飛び入りでドラムに参加され大喝采を博されました。コンクール世界に輝いたことのあるパーティーの振るカクテルと、市内で人気を二分する餃子ブランドの一方の雄の社長自ら焼き上げる餃子には、長い行列が絶えま

せんでした。

植物病理学会の大会を宇都宮大学で開催するのは学会90年、農学部85年の歴史の中で初めてのことであります。近年は国際会議場クラスで開催されるのが常になっていますが、古くて能率の悪い建物、設備での開催で、何かとご迷惑をお掛けしてしまいました。この点、開催者としてお詫び申し上げますとともに、皆様のご寛容とご協力に対しまして改めて厚く感謝申し上げます。

宇都宮高等農林学校時代から大切に受け継がれている庭園では大会期間中アカヤシオ（ツツジ）が咲き誇っておりましたが、今は代って新緑の季節を迎えようとしています。有難うございました。（奥田誠一）

2. 平成19年度大会学生優秀発表賞

受賞者を下記のように決定した。

- 平野恵美子（九大院農）*Turnip mosaic virus* (TuMV) との混合感染における蛍光タンパク質発現 *Cucumber mosaic virus* (CMV) ベクター間の空間的移行動態解析
- 錦織雅樹（北大院農）トマトモザイクウイルス RNA 複製に関与する ADP リボシル化因子様タンパク質の同定
- 八重樫元（岩手連大）リンゴクロロティックリーフスポットウイルス外被タンパク質の40番と75番のアミノ酸の組み合わせ（AとFまたはSとY）がウイルスゲノム RNA の蓄積に必須である
- 小倉里江子（横浜国大院）ウイルス遺伝子のキャップ非依存的翻訳に関与する因子群の探索について
- 石濱伸明（名大院生農）PPS8 のサイレンシングはジャガイモ疫病菌に対する感受性を高める
- 小野澤真理子（京大院農）シロイヌナズナの *PEN2* 遺伝子は、クワ炭疽病菌に対する非宿主抵抗性に関与している
- 玄 康洙（神戸大院自然科学）ナシ黒斑病菌の貫穿菌糸における活性酸素種（ROS）生成遺伝子 *NoxA* の機能解析
- 武田 藍（北大院農）アズキ落葉病とアズキ萎凋病の抵抗性遺伝子の連鎖解析

関根健太郎（東北大院農）キュウリモザイクウイルス高度抵抗性を誘導する抵抗性遺伝子 *RCY1* の高レベル発現
 岩橋福松（京大院農）*Spring beauty latent virus* (SBLV) 感染シロイヌナズナに誘導される全身えそ病徴の発現に関わる *SSB1* 候補遺伝子の一過的発現による遺伝子機能解析

3. 研究会開催報告

(1) 第17回殺菌剤耐性菌研究会シンポジウム

平成19年3月31日、宇都宮大学・大学会館にて、130名の参加のもとに開催された。北関東における耐性菌の現状と事例として、まず、中山喜一氏（栃木県農業試験場）から「栃木県における耐性菌の発生と対策」について講演があり、イネ、イチゴおよびナシの各種病害における耐性菌の現状が報告された。続いて、漆原寿彦氏（群馬県農業技術センター）から「コンニャク根腐病とミョウガ根茎腐敗病のメタラキシル耐性菌問題」について講演があり、耐性菌発生圃場における栽培技術を中心とする様々な取組みが紹介された。次に、イネ用新規 QoI 殺菌剤オリサストロビンについて、BASF の Gerd Stammer 氏から「Orysastrobin-A new fungicide in rice」と題して、いもち病および紋枯病に対する効果、感受性ベースライン、および Pyrosequencing 法による耐性診断法が紹介された。MBI-D 剤耐性と合わせて、いもち病箱処理剤等の使用について議論がなされた。

午後の部では、カルボン酸アミド系に属する新規殺菌剤ベンチオピラドについて、櫻井誠也氏（三井化学）から「ベンチオピラドの作用機作と耐性菌対策」と題して、灰色かび病やうどんこ病などに対する作用特性、感受性ベースライン、および予想される耐性変異の PCR 診断法が紹介された。「DMI 剤に関する諸問題」という大課題のもと3題の講演があり、相馬潤氏（北海道立中央農業試験場）からは、「北海道のコムギにおける DMI 剤の使用法について」と題して、栽培品種の変遷にともない重要病害が変化してきており、それに対応して DMI 剤の使用法も変わってきていることが報告された。菊原賢次氏（福岡県農業総合試験場）と石井英夫氏（農業環境技術研究所）からは、「ナシ黒星病菌における DMI 剤耐性菌の出現について」と題して、福岡県で DMI 剤の効力低下が2005年から顕著になっていること、接種試験でフェナリモル剤に耐性を示す株が分離されたことが報告された。久保深雪氏（神奈川県農業技術センター）からは、「キュウリうどんこ病菌の DMI 剤耐性と分子機構」と題して、DMI 耐性変異が標的酵素 *CYP51* 遺伝子内に存在し、単一アミノ酸置換 G461S をもつ中等度耐性株と、同置換に加えさらに3種類の置換

を有する高度耐性株が存在することが報告された。

講演要旨集購入（1部2,000円）を希望される方は研究会事務局（東洋大学生命科学部、TEL: 0276-82-9216, FAX: 0276-82-9801, E-mail: fujimura@itakura.toyo.ac.jp）までご連絡下さい。（藤村 真）

(2) EBC 研究会ワークショップ2007

EBC 研究会ワークショップ2007が、2007年3月27日12時45分から18時40分まで、宇都宮大学農学部3101教室で開催された。2005年には静岡で120余名を迎えての盛大な発会があったものの、昨年の札幌での第2回目は60名ほどの参加者にとどまったことから、主催者側は今回を正念場の3回目と捉え、期待に耐えるプログラムの作成に腐心してきたが、幸いにも病害防除に強い関心を抱く108名の参加者を得、10題の講演とそれに伴う活発な討論を行うことができた。

今回のワークショップは2部構成とされ、研究会事務局長からの挨拶に続いて、研究会の方向性についての劈頭の講演（茨城県園芸研 富田氏）で、今後この研究会では現場における防除に関する話題について広く取り上げていく旨が述べられた。次いで種々の防除現場における実態が3氏によって紹介された。初めに、現在無事に進行中のコンヒカリマルチラインの導入状況の紹介（新潟農総研 堀武志氏）、次いでリンゴでの防除回数削減の取組みとそれに伴う苦労話（青森県りんご試 雪田氏）、最後は生物農薬エコホープの使用にまつわる問題発生とその解決事例（クミアイ化学 熊倉氏）に関して、具体的なデータを基に講演が進められた。

後半は、新規薬剤の開発から登録・普及に至る各段階における諸問題について、メーカー、試験実施者、評価者、普及担当者等の立場からの講演が6題取り上げられた。メーカーサイドでの開発から実用化試験までの段階（北興化学 斉藤氏）から始まり、試験実施段階での登録申請データ収集と取りまとめに関する問題（佐賀県果樹試 田代氏）、収集されたデータを評価する立場から試験の委託者の考え方（日植防 森田氏）、最後に登録薬剤の普及段階で起こる種々の問題等に関する講演が3題（兵庫県農総セ 神頭氏、愛媛県果樹試 三好氏、アリストライフサイエンス 田口氏）と、それぞれ段階ごとに興味深い実例や、現場ならではの裏話といった内容が披露された。

全体を通じ、種々の話題についての講演時間は必ずしも十分とはいえないこともあったが各講師とも大いに熱弁をふるい、さらに講演の後に比較的長めに設定された討論時間が有効に機能し、関係各方面から質問が多数飛び交

い、現場での防除に携わる研究者等の熱意が会場にあふれることとなった。講演終了後には全体を取りまとめた総合討論がもたれ、関係者の熱い討議が続く内に全プログラムを終了し、最後に事務局から今回のワークショップの成功が告げられるとともに、来年度の開催を約束する旨の挨拶が行われ、松江市での大会開催時における再開を期して閉幕した。(根岸寛光)

(3) 第10回記念バイオコントロール研究会

第10回記念バイオコントロール研究会は、平成19年3月31日(土)に宇都宮大学峰キャンパスで約150名の参加を得て開催された。今回は、本研究会の10回開催を記念してのイベントと、開催事務局をお願いした宇都宮大学夏秋知英氏、栃木県農業試験場石川成寿氏らの企画に基づき、「生物農薬の新戦略とバイオコントロール研究の最前線」のテーマで、3部構成で計13題の講演発表が行われた。第一部では、会長(岐阜大学百町満朗氏)による「バイオコントロール研究会の10回を振り返って」の講演にはじまり、有江力氏(東京農工大)、牧野孝宏氏(静岡県病害虫防除所)によりバイオコントロール研究の展望や今後の取り組みに対する提言がなされた。第2部では、「生物農薬の新戦略」のテーマの下に、石川成寿氏(栃木県農業試験場)、小木曾秀紀氏(長野県野菜花き試験場)、田口義広氏(アリスタ株式会社)及び小坂橋基夫氏(農業環境技術研究所)の4氏により実用化に向けた研究の紹介がなされた。さらに、第3部では、久保田真弓氏(岐阜大学)、成澤才彦氏(茨城大学)、清水将文氏(三重大学)、相野公孝氏(兵庫県農林水産技術総合センター)、竹中重人氏(北海道農業研究センター)及び對馬誠也氏(農業環境技術研究所)の6氏によるバイオコントロール研究の最前線について、利用する微生物(or群集)毎に最新情報について紹介があった。進行は会長及び幹事長が務め、講演終了後会長の司会で総合討論がもたれ、盛会裡に終了した。なお、講演要旨集(2000円)をご希望の方は、對馬氏(農環研) sey@affrc.go.jp までご連絡頂きたい。(百町満朗)

4. 技術士対応委員会

4名の技術士(農業部門・植物保護)が誕生しました

平成19年2月9日に平成18年度技術士第二次試験の合格者が発表されました。新しく4名の方が技術士・農業部門・植物保護に合格されました。

平瀬寒月さんは三井化学株式会社機能化学品研究所に所属され、日本農薬学会員、日本雑草学会員です。中保一浩さんは農業・食品産業技術総合研究機構中央農業総合研究

センターに所属され、日本植物病理学会員です。野仲信行さんは日本農薬株式会社の研究開発本部に所属しておられます。黒木修一さんは宮崎県中部農業改良普及センターに所属され、日本応用動物昆虫学会員です。

平成19年度の技術士第一次試験は、平成19年10月8日(月)に行われます。また、技術士第二次試験は、平成19年8月5日(日)に行われます。詳細は日本技術士会のホームページ <http://www.engineer.or.jp/> をご覧下さい。

日本植物病理学会、日本応用動物昆虫学会、日本雑草学会、日本農薬学会、植物化学調節学会は、技術士・農業部門・植物保護の社会での活躍について、積極的に取り組んでいます。平成19年度も多くの技術士・農業部門・植物保護の誕生を期待しています。

【問い合わせ先】

日本植物病理学会技術士対応委員 石井英夫
E-mail: byori@juno.ocn.ne.jp

【今後の学会活動予定】

1. 第4回教育プログラム開催予定

受講対象：本学会の若手会員(社会人を優先します)

募集定員：25名

開講時期：平成19年8月27日(月)～8月31日(金)までの5日間

開講場所：岩手大学農学部2号館(〒020-8550 盛岡市上田3-18-8)

受講費用：30,000円(学生は15,000円)+懇親会費4,000円(予定)

申し込み：実行委員代表(岩手大学農学部農学生命課程 吉川信幸)宛

メール Yoshikawa@iwate-u.ac.jp あるいは
ファクシミリ(019-621-6150)で、氏名、勤務先(学校名)とその所在地、メールアドレス、電話番号、受講希望理由を明記の上、7月17日(火)13:00以降に申し込んで下さい(事前の申し込みは受け付けません)。

詳細：本号の巻頭綴じ込みをご覧下さい。

2. 談話会・研究会

(1) 第1回植物病害診断研究会

日時：平成19年9月15日

場所：東京大学農学部(東京都文京区)

連絡先：東京大学大学院農学生命科学研究科
植物病理学研究室 難波成任
〒113-8657 東京都文京区弥生 1-1-1
TEL: 03-5841-5053 FAX: 03-5841-5054

(2) 第24回植物細菌病談話会

日時：平成19年10月1日（月）13:00～
10月2日（火）12:20
場所：つくば国際会議場（〒305-0032 茨城県つくば市竹園2-20-3）
TEL: 029-861-0001 FAX: 029-861-1209
<http://www.epochal.or.jp/>
連絡先：第24回植物細菌病談話会運営委員長高橋賢司
事務局：〒305-8666 茨城県つくば市観音台3-1-1
中央農業総合研究センター 畔上耕児
(TEL: 029-838-8931, FAX: 029-838-8929,
E-mail: saikinbyo@naro.affrc.go.jp)

【共催その他】

(1) 第6回フザリウム研究会

日時：平成19年8月30日・31日
場所：公立学校共済組合 蒲郡保養所「蒲郡荘」
(愛知県蒲郡市港町21番4号)
TEL: 0533-68-2188
<http://www5.ocn.ne.jp/~gamaso/index.html>
連絡先：〒464-8601 名古屋市千種区不老町
名古屋大学大学院生命農学研究科
柘植尚志
TEL: 052-789-4030
E-mail: ttsuge@agr.nagoya-u.ac.jp

【関連学会報告】

(1) 日本農学会

平成19年度（第78回）日本農学会大会が4月5日（木）午前10時より、桜の花が咲き誇る東京大学山上会館にて開催された。加盟50学会からなる農学会を代表して鈴木昭憲会長から、また、読売新聞社社長代行の北村行孝編集局科学部長から挨拶があった後、優れた研究業績を讃えて下記の8氏に平成19年度日本農学会賞ならびに第44回読売農学会賞が授与された。授与式に引き続き、受賞者講演会が催され、それぞれの分野における卓越した研究成果が披露された。続いて、元日本植物病理学会会長の日比忠明玉川大学教授（日本農学会副会長）がコーディネーターを務め、

日本農学会賞・読売農学会賞受賞者がパネリスト、北村行孝読売新聞社科学部長がコメンテーターとなって、パネルディスカッション「農学の課題と展望2007」が開かれた。各研究分野における今後の取り組みのほか、昨今の研究環境、とりわけ短期成果主義の問題点や人材育成の課題などが活発に論じられた。その後、受賞者を囲む祝賀会に移り、日本植物病理学会の眞山会長および関係者を含む参加者間の交流が盛んに行われた。なお、日本農学会からの推薦で今回受賞された米山勝美明治大学教授（元日本植物病理学会会長）には、改めてお祝いを申し述べたい。

本年度受賞者

- 1) 楠原征治氏（新潟大学教授）「鳥類の卵殻形成における骨髄骨の機能解明に関する先駆的研究」
- 2) 佐竹徹夫氏（元北海道農業試験場研究室長）「イネ生殖生長期における温度障害発生機構の解明および冷害防止のための前歴深水灌漑技術と耐冷性品種評価法の開発」
- 3) 田村敏樹氏（農業生物資源研究所研究センター長）「遺伝子組換えカイコの作出と利用法に関する研究」
- 4) 塚本勝巳氏（東京大学教授）「ウナギの回遊に関する研究」
- 5) 服部 勉氏（東北大学名誉教授）「土壌微生物とその生息環境に関する研究」
- 6) 丸本卓哉氏（山口大学長）「土壌微生物の養分供給機能と環境修復技術の開発に関する研究」
- 7) 山本昭平氏（名古屋大学教授）「果実の糖集積・品質向上機構に関する生理・生化学的研究」
- 8) 米山勝美氏（明治大学教授）「植物病原菌の病原因子の解明と病害抵抗性植物の創成に関する先駆的研究」
(石井英夫)

【書評】

小林享夫 著：『日本産樹木寄生菌目録一宿主，分布および文献一』A4判1227頁 2007年4月 全国農村教育協会 10,500円

小林享夫東京農業大学国際食料情報学部客員教授が、これまで収集された文献・資料を基に執筆された本目録は、本文、文献目録、文献と名英名一覧、各種索引から構成されている。前書によれば、小林教授は1972年の有用植物病名目録の編集をきっかけに文献収集とカードの作成を開始され、本年の2月までその校正が続けられたとある。実に35年に及ぶ編集作業である。本書の特徴は、日本産の樹木寄生菌が初めて海外で報告された1878年から2000年までの間に、日本産として果樹を含めた木本植物上に記

録された菌類 3800 余種（変種を含む）と属・種未同定菌 800 余種について、*Abortiporus biennis* から *Zythia* sp. までをアルファベット順に列記し、それぞれの採録菌種名、国内分布（県単位）とその準拠する文献を 1000 頁強に渡り掲載していることである。イメージとして、アメリカ植物病理学会発行の Farr らによる「Fungi」を思い浮かべると良いだろう。本文では菌名、命名文献、記載文献、異名、病名、宿主記載文献、分布記載文献が英和両文で掲載されている。日本植物病理学会編の有用植物病名目録では病名の初出文献が掲載されているが、その後の発生報告については記載されていない。そのため、植物病害研究に携わる者は文献検索に多大な労力を割いてきた。しかしながら本著は、その後の追加宿主、県単位の発生報告、変遷の激しい菌類の学名について、各種学会報、農試報、研究会報など収集しうる全ての文献を元に、正確かつ最新の情報が織り込まれている。特に圧巻なのは 200 頁におよぶ各種索引であり、5500 編の文献目録、宿主ごとの菌類目録、宿主学名と和名対照表、採録文献の書誌名の英和対照表である。この目録は、果樹を含めた樹木病害のみならず、菌類による植物病害研究・診断・論文執筆に欠かすことのできない必携の著となるであろう。

本著を手にとると、長年の編集作業に携わった著者に対する敬意は勿論のこと、また別の感慨が湧いてくる。それは、植物病害研究にうちこみ、数多くの文献を遺してきた先人達への畏敬の念であり、我々もその足跡を刻む一人であるということであらためて考えさせられる。（中島千晴）

【学会ニュース編集委員コーナー】

本ニュースは身近な関連情報を気軽に交換することを主旨として発行されております。会員の各種出版物のご紹介、書評、会員の動静、学会運営に対するご意見、会員の関連学会における受賞、プロジェクトの紹介などの情報をお寄せいただきたくお願いいたします。

投稿宛先：〒170-8484 東京都豊島区駒込 1-43-11

日本植物防疫協会ビル内

学会ニュース編集委員会

FAX: 03-3943-6086

または下記学会ニュース編集委員へ：

加来久敏、石井英夫、寺岡 徹、竹内妙子、小板橋基夫、各委員宛

編集後記

学会ニュース第 38 号をお届けいたします。暖冬で異常に早い開花が予想された桜ですが、その後の天候で平常よりやや早い開花を迎えました。その桜が開花した宇都宮大学で開催されました平成 19 年度の日本植物病理学会大会は、3 月 28 日より 30 日まで 3 日間開催されましたが、1,000 名を越える会員が参加し、盛会裏に閉会いたしました。宇都宮大学の先生方はじめ大会関係者の方々に厚くお礼申し上げます。

本大会で、昨年度の大会より始まった学生優秀発表賞の選考が行われましたが、その受賞者を掲載することができました。受賞者の皆さん、おめでとうございます。今後のご活躍を期待いたします。

また、大会に前後していろいろな研究会やシンポジウム・ワークショップが開かれ、学会の活発な活動を垣間見ることができました。特にバイオコントロール研究会は第 10 回記念研究会という節目のイベントでした。ますますの発展を祈念いたします。

再び受賞者の話題ですが、米山勝美明治大学教授が平成 19 年度日本農学賞ならびに第 44 回読売農学賞を受賞されました。誠にありがとうございます。これは昨年度の道家紀志前々会長に続く受賞となります。

さて、学会ニュースの編集は、本年度から石井英夫、寺岡 徹（幹事長）、竹内妙子、小板橋基夫、加来久敏（委員長）という構成で行うことになりました。宜しく願いいたします。長く編集委員長を務めてこられました松山宣明先生、旧編集委員の夏秋知英先生、本当にご苦労さまでした。（加来久敏）